
I a m y o u . ~テーマパーク殺人事件~

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

I a m y o u ｝テーマパーク殺人事件｝

【Nコード】

N 6 8 1 5 B

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

ある雨の日、蘭とコナンが階段から落ちた弾みで中身が入れ替わってしまった。戸惑いつつもそれぞれ“蘭”“コナン”として生活を続ける2人。そして二人の前で殺人事件が！

プロローグ

7月上旬のある日のこと。

まだまだ梅雨は明ける気配すら見せず、その日も朝からどんよりとした天気。昨夜から降った雨は止む気配すら見せない。

「それじゃ、お父さん行ってくるわね」

「じゃ、おじさん行ってくるね」

毛利探偵事務所のドアの前に毛利蘭と江戸川コナンの二人が立っていた。

これから二人は登校するのだ。

「…まったく、ここの毎日雨ばかりだと嫌になっちゃうわね」

「仕方ないよ。さつきTVでも梅雨明けはもうしばらく先だ、って言ってたでしょ？」

「そうだけどね…。私、雨って一番嫌い。何だかこっちも気分が滅入ってくる気がしてさ」

そして蘭は一步踏み出した。

そのとき、昨夜からの雨で濡れていたからだろうか、蘭がコンクリートで滑り、バランスを崩した。

「蘭ねーちゃん、危ない！」

慌ててコナンが蘭を抱きとめようとした。

しかし、思った以上に勢いがあり、かつ体格の差もあつたのだから、コナンも足を滑らせてしまった。

「うわーっ！」

「キヤーツ！」

派手な音を立てて二人が階段を転がり落ちていく。

ガッーン！

そして下まで落ちていった二人はお互いに頭をぶつけ、そのまま
気を失った。

*

「う、ううん」

「気がついたようです。もう大丈夫ですよ」

医者の声がある。

(…ここは、どこだ…?)

コナンは自分が病室のベッドに寝ている、と気がつくのには少し
時間がかかった。

「よかった、気がついたようだ」

「…本当ね、一時はどうなるかと思ったわ」

コナンは目を開ける。

見ると自分の顔を心配そうに見ている毛利小五郎とその妻で今は
小五郎と別居している妃恵理がいた。

(…あれ、何でおっちゃんとおばさんが?)

「大丈夫か?」

「大丈夫、蘭?」

(…蘭だって?)

慌てて上体を起こすコナン。

*

それと同じ頃。

「う、ううん」

蘭も意識がはっきりしてきた。

「…どうやら気がついたようだね」

聞き覚えがない声がある。

(…あれ? 誰だろう)

蘭はあたりを見回す。

(…あれ? 元太君に光彦君、歩美ちゃんまで…。何でこんなところ
にいるの?)

そう、自分が寝ているベッドを小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美の3人が見ていたのだ。

「…よかった気がついたようですね」

「大丈夫、コナン君？」

「コナン君？」

それを聞いた蘭は思わず起き上がった。

*

「おじさん、おばさん。何でここにいるの」

「おじさん、おばさん、って…。蘭、お前まだ寝ぼけてるのか？」

「そうよ。自分の親の顔も忘れたの？」

「自分の親、って何なんだよ。だからオレは…」

ここまで言いかけたとき、コナンは周りを見るのに違和感を覚えた。

そう、本来の自分の身長を考えると低いはずの目線が普段よりも高い位置にあるのだ。

(…どうしたんだ、一体?)

何気なくコナンは自分の寝ているベッドの横に置いてある鏡を覗き込んだ。

「…!」

思わず自分の目を疑うコナン。

そう、ベッドに寝ているの自分の姿は紛れもなく蘭の姿だったのだ。

*

「コナン君、って…。冗談やめてよ」

蘭が言う。

「冗談、って…。コナン君、どうしたんですか？」

「…そうよ、コナン君。まだ頭を打ったシヨックが残ってるんじゃないの？」

「そうだよな。探偵事務所の前でコナンと蘭ねーちゃんと頭から血

を流して倒れてる、って聞いてオレたちびっくりしたんだぜ。死んだのかと思っただぜ」

元太たちが何の違和感もなく自分のことを「コナン君」と呼ぶのに蘭は戸惑っていた。

(…どういうこと?)

その時だった。

「…痛っ…」

蘭は自分の頭にズキツ、と来る痛みを感じた。

慌てて傷口のあたりを押さえる蘭。

(…え?)

蘭の右手が眼鏡のフレームに触れた。

(…なんで私、眼鏡なんかしてるの?)

「大丈夫、コナン君?」

(…だからなんでコナンなの?)

蘭は辺りを見回す。

と、窓ガラスにベッドに横になっている自分の姿が映った。

「え…」

思わず絶句する蘭。

そう、窓ガラスに映った自分の姿は毛利蘭の姿ではなく、江戸川コナンの姿だったのだ。

*

「…ねえ、おじ…じゃなかったお父さん。ら…じゃない、コナン君は?」

「…コナン君なら隣の病室にいるわよ」

恵理が答えると“蘭”はベッドを抜け出し、隣の病室に向かった。

「おい蘭、ちよっと待て!」

背中では小五郎の声がする。

隣の病室を覗くと元太や光彦、歩美と言ったクラスメイトとコナンの学校の担任である、という小林澄子教諭の姿が見えた。

「…蘭おねえちゃん…」

「あ…、みんな。お見舞い有難うね。ら…、いやコナン君気がついた？」

「さつき気がついたんだけど…」

「そうですね。何だかコナン君、わけがわからないこと言ってるんですよね」

(…もしかして…)

「あ、あのね。みんな。お姉さんちょっとコナン君と二人だけでお話しがしたいの。だからちょっと病室から出てくれないかな」

「…でも…」

「すぐ終わるから。ちょっとごめんね」

そして“蘭”はその場にいた全員を追い出すと、病室のドアを閉める。

「…誰もいなくなったな。…ねえ、一つ聞きたいことがあるんだけど。…もしかして、蘭ねえちゃん？」

“蘭”が“コナン”に向かって言う。

「…コナン君？」

“コナン”が“蘭”を指差して言う。

「…い、一体どういうことなの？」

「それはわからないよ。もしかして…ボクと蘭ねーちゃんの中身が入れ替わったとしか言いようがないよ…」

「そんな…、ドラマや映画じゃあるまいし…」

「でもボクは蘭ねーちゃんの外見なのに、中身はコナンだし、蘭ねーちゃんはコナンの外見なのに中身は蘭ねーちゃんなんだよ。そうとでも考えなきゃ説明がつかないよ」

勿論二人は今時分の目の前に起こっていることがには信じられなかった。

しかし、コナンの目の前にいるのは紛れもなく江戸川コナンの姿をした少年であり、蘭の目の前にいるのは毛利蘭の姿をした少女なのだ。

精神が入れ替わる…、そんな実際あり得そうもないことが今二人の目の前に起こったのだ。

「…と、とにかくどうする、コナン君？」

“コナン”が“蘭”に聞く。

「どうすると、言われたって…。おじさんやおばさんはボクのことを『蘭』だって思ってるし、元太たちは蘭ねーちゃんのことを『コナン』だって思ってるんだから…」

“蘭”が言う。

「そうよね、元に戻る方法が見つからないんだもんね…」

「となると、このまましばらくはお互いのフリをするしかないかもしれないね。…つまり、ボクは蘭ねーちゃんのフリをして、蘭ねーちゃんはボク、つまりコナンのフリをして周りに話を合わせるしかないよ」

「…そうするしかないか。…ねえコナン君。このことは二人だけの秘密だからね」

「わかってるよ」

こうしてコナンは“蘭”の、蘭は“コナン”のフリをする、という奇妙な生活が始まったのである。

事件編

コナンが「蘭」、蘭が「コナン」となって生活をする日が数日過ぎたある日のこと。

“蘭”と親友の鈴木園子が道を歩いていた。

「…それにしても…」

「なに、園子？」

「あんた急に音痴になったわね。こないだまでそんなことなかったのに」

そう、“蘭”は園子の誘いを受けてカラオケボックスに行った帰りだったのだ。前々から（つまり二人の中身が入れ替わる前）園子と約束していたこともあり、どうしても断ることが出来なかったのだ。

「…ハハハ、ごめんね、園子。私、あの曲あまり聴いたことないから…」

「あの曲、あんたのオハコでしょ？ いつも歌ってるじゃない」

「あ、そ、そうだったっけ？」

「そうだったっけ、じゃないわよ。大体ここ数日、あんた様子おかしいわよ。何だか蘭であって蘭じゃないみたい」

「だから言ってるでしょ、気のせいだって」

「ふーん、ならいいんだけど。…それよりさ、今度の日曜日覚えるでしょ？」

「もちろんよ。トロピカルランドに行くんでしょ？」

「そ、よかつたらコナン君も誘っていいからね」

「わかつたわ。じゃ、バイバイ」

「じゃね」

そう言つと“蘭”は毛利探偵事務所へ続く階段を昇っていった。

「只今」

「お帰りなさい」

“蘭”を“コナン”が出迎えた。

「…おじさんは？」

辺りを見回して小五郎がいないのを見て“蘭”が聞く。

「ちよつと用がある、って言っただけだわ。…それよりコナン君、大変じゃない？ 小学生なのに高校生の授業を聞くなんて」

「心配しないでいいよ。ちゃんとノートは取ってるし」

（…オレだって最近まで授業受けてたんだけどな）

「…それより蘭ねーちゃんはどうか？」

「…まったく。高校生が小学校の授業受けるなんて、まるで拷問みたいなものね。回りにも話合わせなきゃいけないし…」

（ハハハ。これでオレの苦勞が少しはわかったか？）

「…それに歩美ちゃんが言ってたわ。『何だか最近のコナン君はいつものコナン君と違う人みたいだ』って…」

「仕方ないよ、今のところ元に戻る方法がないんだから。お互いが周りに話をあわせるようにしなきゃ」

「…確かにそうよね。…そういうえばコナン君、聞いた？」

「ああ、トロピカルランドの話でしょ？ 園子ねーちゃん、ボク…、って言うか『コナン君のことを誘ってもいい』って言ってたよ」

「そう、よかった。これで園子に気づかれなくていいわね」

*

そして日曜日。

その日は朝から久し振りに晴天となり、早くも気温は25度を超える暑い日となっていた。

トロピカルランドは家族連れでにぎわっていた。

「お待たせー」

園子がトレイに乗ったドリンクを持ってきた。

既に昼過ぎ、と言うこともあり、3人は食事を取ろう、ということになったのだ。

「それにしても暑いわね」。日焼け止めクリーム塗っというてよかつたわ」

園子が言う。

3人が座っているテーブルは一応日除けの傘があるのだが、せいぜい頭を日光から避ける程度ではない。

(…そんなこと言ったらあっちの方が大変なんじゃねえのか?)

“蘭”は広場の方を見てそう思った。

広場では西洋のお姫様の格好をした女性や甲冑を身にまとった騎士、あるいは縫いぐるみを着たスタッフが回りに集まる子供達を相手にしていたのだ。

(…こんな暑い中、あんな格好でサービスしなきゃいけないんだから大変だよな…)

「…ちよつと蘭、あんた見てるの?」

「え? …あ、そ、その広場見てたの。こんな暑い中大変だなあ、つて。…だつてほら見てよ」

“蘭”が指を指す。その方向にはウサギの縫いぐるみが左手に数多くの風船を持ち、それを一つひとつ子供達に渡していた。

「この暑い中あんな縫いぐるみ着て子供達にサービスしてるんだもん」

「確かにそうかもね」

そう言うと園子はショルダーバッグからデジタルカメラを取り出す。

「蘭、コナン君。写真取るわよ」

そう言うと園子は二人にカメラを向け、シャッターを切る。

「…それにしても、あんたもコナン君もここの所変ね」

「何が?」

「…何ていうのかなあ…。確かに蘭なんだけど、何処となく別人のような感じがするのよね。コナン君も何だかコナン君であってコナン君じゃない気がするし…」

「き、きつと気のせいよ。ね、ら…、いやコナン君」
「そ、そつだよ。きつと気のせいだよ、園子ねーちゃん」
やはりコナンが“蘭”、蘭が“コナン”として生活していても自
分達の気がつかないところで地が出てしまうのだろうか。

*

食事を取って3時間ほど後、3人の元に縫いぐるみやお姫様の格
好をした女性が近付いてきた。

「…そつだ、折角だから写真を撮ってもらおうよ」

と、丁度傍にいた西洋のお姫様の格好をしていた女性が、

「じゃ、私がシャッター押しますよ」

「いいんですか？ それじゃ、お願いします」

そう言われて、園子がデジカメを渡し、3人は写真を一枚撮った。

「…コナン君、ありがとうは？」

「う、うん。ありがとう」

そう言った“コナン”の頭をウサギが左手で撫でる。

その様子を園子が写真に収める。

あつという間に時間は過ぎて既に夕方の4時近くになっていた。
そろそろ帰ろうかと3人は正面に向かっていたその時だった。

「きゃああああ！」

女性の悲鳴が聞こえた。

「なんだろう？」

「行ってみようよ！」

“蘭”が園子に言う。

「うん！」

そして3人は声のした方向に向かって走っていった。

3人が声のした場所に来ると一人の女性が立ちすくんでいた。

「どうしたんですか？」

“蘭”が聞く。

「な…中山さんが…」

「中山さん？」

そして女性の指差す方向を見る。

「うっ…」

思わず絶句する三人。

その部屋はスタッフの控室となっているようで、何の飾り気もない机と椅子、そしてガスコンロが載った流し台と小さな冷蔵庫があるだけの部屋だった。

その中でTシャツ、ハーフパンツ姿の男が倒れていたのだ。

「園子ね…、じゃなかった園子。警察を呼んで！」

「わ、わかった！」

“蘭”に言われて園子は携帯電話を取り出した。

「…蘭、電話したわよ。すぐに来る、って」

「ありがとう」

そして園子は携帯電話をショルダーバッグに入れた時、何か様子が変なのに気がついた。

いつもだったら現場を見て呆然としているのが蘭で、コナンはいつも冷静になっているのに今日は蘭が冷静でコナンが呆然としているのだ。

「…コナン君。コナン君？」

園子にそう言われて“コナン”が気がついたか、

「な、何。園子、…ねーちゃん」

「…どうしたの？ いつもだったらコナン君が率先して『蘭ねーちゃん、警察呼んで！』って言うのに…」

「そ…、それは…」

「…そ、そりゃあコナン君だって呆然とすることがあるわよ。ね、コナン君」

“蘭”が慌てて助け舟を出す。

「あ、そ、そうだよ。そういうことだってあるよ」

そして“蘭”は“コナン”の耳元に近づき、園子に聞こえないように小さな声で、

「大丈夫？ 蘭ねーちゃん？」
と囁いた。

「う…、うん。大丈夫」

「…しっかりしてよ。園子ねーちゃんは“蘭”が本当はボクで、“コナン”が蘭ねーちゃんだ、って知らないんだから」

「…わかってるわよ」

程なく警察がやってきて現場検証が始まった。

「…被害者は中山利晃さん、ここに務めているスタッフの一人です」
高木刑事が言つと目暮警部が、

「それで、死亡推定時刻は？」

「ええ、死亡推定時間は午後1時から3時の間と推測されます。ですが…」

「どうしたのかね？」

「発見者でもある蘭さんたちの証言をまとめると午後3時以降、ということになるんですよ」

「どういうことだ？」

「はい。被害者の中山さんは普段はここでウサギの縫いぐるみを着て仕事をしているスタッフなんだそうですが、その縫いぐるみと蘭さんたちが3時少し前に写真を撮ってるんですよ」

「それは本当かね？」

「ええ。私が持ってきたデジカメで撮って貰ったんです」

園子が言つ。

「…となると…」

「はい。3時ごろ中山さんが休憩のためにこの部屋に戻って来た所を狙って犯人が殺害したのではないかと推測されるのですが…」

「じゃあ、Tシャツにハーパンツ姿だった、というのは…？」

「おそらく縫いぐるみを脱いだときに襲われたのではないかと。」

先ほど中山さんが着ていた、という縫いぐるみを見せてもらったんですがね。知つての通り回りが毛で覆われてますからね。おそらく中はかなり暑さだったのではないかと、と

「ふうん…。となると犯行時刻はしたいが発見される1時間ぐらい前の午後3時ごろ、ということになるな」

「それですね、その前後にこの控え室に来た人物、というのが二人いるんですよ」

「二人？」

「ええ、一人は村井健一さん。もう一人は佐々木正孝さん。いずれもこのスタッフです」「その二人をここに呼んできてくれ」

「はい」

程なく二人がやってきた。

「…ちよつとお二人に話を聞きたいんですが」

「…中山さんのことですか？」

佐々木正孝が言う。

「まあ、そうですね」

「…ですから刑事さん、その若い刑事にも言いましたが、僕は何もやってません、つて。その中山さんが死んだ、という3時ごろ控室に戻つたのは確かですけど、その時には既に中山さんはいなくなってますから…」

「…村井さんは？」

「オレも同じですよ。…まったくもう…。こつちはこれから用がある、つてのに…」

何か約束でもあるのだろうか、先ほどから村井健一が右手にしている腕時計をチラチラ見ている。

“蘭”は何気なくテーブルを見る。

(…あれは?)

机の上にジュースの入ったコップが置いてあったのだ。

よく見ると中に氷でも入れてあったのだろうか、透明な水がすっかり溶けてしまい、ジュースが上のほうに分離してしまっていた。“蘭”はポケットからハンカチを取り出すと、コップをそれにくるみ、持ち上げた。

(…あれ?)

コップが全然冷たくなかったのだ。おまけにコップの周りにも水滴一つ付いていない。

「…あの、刑事さん」

佐々木が言った。

「ちよつとのどが渴いたんで…いいですか?」

「ああ、構わんよ」

そういうと佐々木正孝は冷蔵庫からペットボトルを取り出した。

…と、

「佐々木、オレの分も取ってくれないか?」

「あ、いいよ」

そして佐々木が村井にペットボトルを渡す。村井はそれを左手で受け取ると蓋を開け、ペットボトルの中の飲み物を飲み始めた。

そして佐々木も自分の分を取ると、蓋を開け右手に持っているそれを一口飲んだ。

その時だった。

(…そうか、そういうことだったのか!)

“蘭”の脳裏にある結論が思い浮かんだ。

そして“蘭”は反射的に左手に手をかける。…が、すぐに「大事なこと」に気がついた。

(…そうだ、オレは今“蘭”なんだ!)

そう。今、自分は中身がコナン(こと新一)なのだが、外見は毛利蘭なのだ。つまり、腕時計型麻酔銃も変声機も“コナン”である蘭が持つことになるのだ。

(蘭が時計型麻醉銃や変声機の使い方を知ってるはずがないし…。弱ったな…、これじゃ園子に麻醉を打って眠らせることも出来ねえ…)

「…ねえ、蘭どうしたの？ そんな怖い顔しちゃって？」

何も事情を知らない園子が“蘭”に向かって話しかける。

どうやら“蘭”は傍から見て険しい表情になっていたらしい。

(…仕方ねえ。なるようになるさ)

“蘭”はそう思いなおすと、

「ん？ え？ あ、な、なんでもないわよ。それよりさ、園子」

「なに？」

「例えば、の話よ。例えば犯人が既に死んでいた被害者を生きているかのように見せかけること、って可能なんじゃないかな、って思ってた」

「…そんなことできるわけないでしょう？ 大体死亡推定時刻は発見されたときの1時間くらい前でしょ？」

「うん、そうなんだけどね。…警部、死亡推定時刻、って言うのは大体2時間くらいの幅を見て決めるんですよね。高木刑事も『午後1時から3時の間と推測される』って言ってましたよね？」

“蘭”が目暮警部に聞く。

「ああ、そうだが。それがどうかしたのかね、蘭くん」

「…いや、こういうことが出来るんじゃないかな？ 被害者、って普段は縫いぐるみの中に入ってるんじゃないよ？ 縫いぐるみっていうのはさ、外から見れば誰が入っているか、何てわからないじゃない。だからさ、被害者以外の人が入っても誰も気づかないんじゃないかな、って」

「…つまり君は何が言いたいのかね？」

「こういうことだと思っんですよ。被害者の中山さんが2時過ぎまで生きていた、というのはあくまでも私達の証言でしかないわけですよ？ もし、その私達の証言が間違っていたとしたら、って」

「間違っていた？」

「うん。あの縫いぐるみに入っていたのが中山さんだと思っていたのは私達の勘違いなんじゃないかな、って」

「どういうこと？」

「ほら、縫いぐるみ、って外から見たら誰が入っているかわからないでしょ？ だからもし中山さん以外の誰かが入っていても気づかないんじゃないかな、って」

「…じゃあ蘭くん、君は…」

「ええ。私たちが見たとき、既に中山さんは殺されていて、あの縫いぐるみに入っていたのは犯人じゃないか、って思っていますよ。そうやって犯人は『まだ中山さんが生きていた』と思わせることにした、と思うんですけど…」

「じゃあ…」

「ええ。私はその『死亡推定時刻は午後1時から午後3時。しかし3時少し前に縫いぐるみに入っていた中山さんを見かけたから殺害時刻はそれ以後』というのは信用できないと思うんです」

「信用できない？」

「ええ、私はこう思っています。犯人は私達が証言した2時半より前に既に中山さんを殺害して、死体を隠すと、その後で自分が中山さんが着ていた縫いぐるみを着たんです。そして、何事もなかったかのように振舞う…。誰だって縫いぐるみを見たって誰が中に入っているか、何て気にも留めませんよね。犯人はそれが狙い目だったと思うんです」

「…しかしね、蘭くん。君の言うことがもし本当だとしてもだよ、その証拠はあるのかな？」

「証拠なら二つありますよ」

「二つ？」

「まず一つはテーブルの上を見てください」

見ると、テーブルの上にコップが置いてあった。

「これがどうかしたのかな？」

「よく見てください。上と下で分離してますよね」

「ああ、確かに」

「おそらくこれは上の部分は氷が溶けて水になった部分で、下の部分はジュースか何かの部分だと思うんです。今日は暑いから、おそらく中山さんはジュースに氷を入れて飲もうとしていたんです。そこを犯人に襲われた…。やがて時間が経つにつれ、コップの中の氷が溶けてしまい、上下に分離してしまった…」

「だからと言ってそれが被害者が2時半より前に殺された、という証拠にはならないんじゃないのかな？」

「いえ、証拠になるんですよ。…実は私、これをちよつと触ってみただけで冷たくなかったんですよ」

「冷たくなかった？」

「はい。もし、中山さんが3時以降に殺されたとしたら、そんなに時間が経っていないんですから、仮に氷が溶けていたとしてももう少し冷たくなっているはずだし、コップの周りに水滴が付いていると思うんです。それなのに冷たくもないし、水滴も付いていない。ということはかなり長い時間、この部屋にこのコップが放って置かれていた、ということになるのではないでしょうか？」

「で、もう一つの、その被害者が3時以前に殺されていた、と君が言う証拠は何かね？」

「園子、デジカメ貸して」

「え？ …ああ、いいわよ」

そう言うつと園子はショルダーバッグの中からデジカメを取り出し、「蘭」に渡した。

“蘭”はデジカメを操作して液晶ディスプレイに写真を映し出す。

「…この写真を見て下さい」

そういつと“蘭”はある写真を出した。それは縫いぐるみが子供達に風船を渡している場面だった。

「この写真では縫いぐるみは左手に風船の束を持って右手で渡していますよね。ところがこれから2時間ほど後の事なんですが…」

そう言うと“蘭”はデジカメを操作し、別の写真を出した。それは縫いぐるみが今度は“コナン”の頭を左手で撫でている写真だった。

「この写真では縫いぐるみはら…、じゃなくてコナン君の頭を左手で撫でてますよね。私もそうですけど、普通頭を撫でたりするとき、って利き腕を使いますよね？　つまり最初に風船を渡していた縫いぐるみは右利きだったのに、コナン君の頭を撫でている縫いぐるみは左利きだった、ってことになるんですよ。おかしいと思いませんか？　こんな短時間で利き腕が変わるなんて…。つまりこれは風船を渡していた時と、コナン君の頭を撫でていた時に中に入っていた人は別人、ということになるんです。この中から考えると犯人はあなたしかいないんですよ…。村井さん！」

「な、なんだって？」

「村井さん、あなた右手に腕時計してますよね？　大抵腕時計というのは利き腕と逆の方にするものですよ。まあ、中には好みで利き腕の方にしてる人もいるから断定は出来なかったんですけど、さっきペットボトルの飲み物を飲んだとき左手にペットボトルを持ちましたよね？　つまりそれはあなたが左利きということになりませんか？」

「…成程ね。そこまで見破ってたとは。たいしたお嬢さんだ」

「…じゃああんたが…」

「その通りですよ。アイツはね、ちよつと自分勝手な所があつてよく喧嘩してたんですよ。それで我慢できなくなってこんなことになっちゃったんですけどね。…それにしてもこんなことでアリバイ工作が失敗するとはね…」

*

「…でも蘭、凄いわね」

園子が“蘭”に話しかける。

「…何が？」

「あんだ、今日凄く冴えてたじゃない。まるでおじさんみたいだったわ」

「あ、そ、そうね。おじ…、じゃなくてお父さんやコナン君と一緒に現場見てて、いつもお父さんの推理見てるからね。私も推理力が鍛えられたのかしら？」

(ハハハ、そりゃそうだろ。中身が中身だからよ…)

“蘭”はそう思った。

(…でもこれからは気をつけねーといけねーな…。もしこのままだったら、いつオレと蘭の中身が入れ替わっているってバレるかもしれないからな)

エピローグ

結局梅雨の晴れ間はその日だけであり、次の日からまた雨が降り出した。

それでも天気予報によると雨が降りやすい天気はここ2〜3日くらいで、週末には天気も回復して早ければ来週末にも梅雨明けの宣言が出されるだろう、ということだった。

「じゃ、お父さん、行って来るね」

“蘭”が小五郎に言う。

「ああ、気をつけるよ。この間見たく階段で滑って転げ落ちたなんてことになるなよ」

小五郎が言う。

「コナン君、行け」

“蘭”が“コナン”に呼びかける。

「うん」

そして二人は玄関を出た。

「…そうか…、もうあれから1週間近く経つんだね」

“蘭”が呟く。

そう、コナンが“蘭”となり、蘭が“コナン”となって1週間が経とうとしていた。

二人も相変わらず慣れないことで戸惑ってるし、二人の周囲もどこか様子がおかしいことに薄々と感じているようだ。

やはり、自分達の目の前にいるのは確かに“蘭”や“コナン”なのだが、普段の二人とはどこか違っていているのだろうか。

「…そういえばあの日もこんな雨が降っていたのよね」

“コナン”が言う。

「このまま戻らなくなっちゃったらどうなるんだろ…」

「どうなる、って言ったって…。なるようになるしかないよ」
「そうね…」

そして“コナン”は一步踏み出した。

「あっ…」

“コナン”が叫んだ。

そう、雨で濡れていたのか、“コナン”が階段で足を滑らせてしまったのだ。

「蘭ねーちゃん、あぶない！」

“蘭”が慌てて手を伸ばす。

何とか“コナン”を捕まえたものの、自分も足を滑らせてしまい、二人は階段を転げ落ちていった。

「…いつてえ…」

コナンは頭を掻きながら身を起こした。

慌てて自分の体を見る。派手に転がった割には擦り傷程度で済んだようだった。

「蘭ねーちゃん、大丈夫？」

コナンは自分の目の前にいる蘭に話しかける。

「う…うん、大丈夫だけど」

そう言いながら蘭も身を起こしたその時、

「あーっ！」

二人が同時に声を上げた。

「…蘭ねーちゃん？」

声を発したコナンの目の前には蘭がいた。そして、

「…コナン君？」

声を発した蘭の目の前にはコナンがいるのだ。

「…元に戻ったんだ！」

そう、おそらくもう一度転げ落ちたショックだったのだろう。二人の精神は元の体に戻っていたのだ。

「よかった！ 元に戻ったんだ！」
「そうだね、元に戻ったんだね！」

「…おい、お前ら、何騒いでんだ！」
小五郎が不思議に思ったのか上から下の二人に向かって叫んだ。
「ん、なんでもないので、お父さん」
蘭が慌てて言う。

「それならいいけどよ、怪我はないのか？」
「う…、うん。大丈夫、心配しないで」

*

「じゃあね、園子。バイバイ」
園子と別れた蘭は歩道を歩いていたら、と、
「蘭ねーちゃん！」
コナンが蘭に駆け寄ってきた。
「あ、コナン君」
そして二人は並んで歩き出した。

「…ねえ、蘭ねーちゃん」
「何？」

「…結局何だったんだらうね、あれは」
コナンが言う。

「そうね…、精神が入れ替わっちゃうなんて。でも、やっぱり自分の体が一番いいわね」

蘭が言う。
「そうだよな。やっぱりボクはボク、蘭ねーちゃんは蘭ねーちゃんなんだからね」

（…そうだよな、体が小さくなった上に蘭と精神が入れ替わっちゃまうなんて…。もうこんなことはごめんだぜ）
コナンは思った。

I a m y o u . ~テーマパーク殺人事件~

(
終
わり
)

エピローグ（後書き）

こんにちは、ともゆきです。

私は何の気なしに行ったことが「バランス修正計画」という一大企画にまで発展してしまいました。が嬉しいやら恥ずかしいやら…（笑）。

（作者注：この小説が「コナン小説リング」と言うサイトで掲載された2004年に「ある人物同士の精神が入れ替わる」という「バランス修正計画3」と言う企画を実施していました）

ま、本来はミステリーにこういったSF的要素を持って来るのは邪道なのかもしれませんが（念のため言っておきますが、私がSFが嫌い、というわけではありませんよ。それどころかSF大好きですから）、一つくらいこういう話があってもいいだろ、と思って書いて見ました。

…けど、内容はいつもどおりのミステリーでしたね（^^；。それではまた。

尚、この作品の感想等は「名探偵コナンノベルズ」の掲示板の方にお願いいたします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6815b/>

I am you . ~テーマパーク殺人事件~

2008年8月29日19時04分発行